



美山・河内谷の村里

品角小文

農民運動散歩記(九)

品角一郎
(遺稿)

伊根と諸選挙

妻、日ヶ谷、筒川等の合併初の町議選では、^二名の大きな町議団にまで前進したのである。

伊根村の文化運動

この「農民運動散歩記」は、故品角一郎氏(一九一一年一九八一年)が、その最晩年に死に至るまで書きつづけられていたものである。

すぐれた画家であり、民主的な詩人でもあった品角氏は、一九四六年から約十年間農民運動に携わっていたことがある。日本農民組合京都府連合会の泉隆書記長のもとで、書記として京都府連の再建と発展のために活躍されたのである。この記録はその当時の思い出を書きつづられたものである。

品角氏がこの「散歩記」を書かれるようになったのは、一九七八年の夏に、当時私どもがやっていた京都府の農地改革史に関する研究会で、品角氏に敗戦直後の農民運動についての思い出を語って貰ったことがきっかけ

になっている(この研究会の成果は、京都府農地改革史編纂委員会編「京都府農地改革史」一九八〇年刊、にまとめられている)。本文にも書かれているような事情から、日農京都府連に関する資料が焼失してしまっていだため、関係者から当時の農民運動の状況についても聞き取りを行うことになったのである。

この中では、品角氏が農民運動にかかわるようになつた事情や、丹後を中心とし府下全域に及ぶ農民運動の状況が、数多くのエピソードを交えながらビビッドに描かれている。

体験的農民運動史として、農地改革期(一九四五~五〇年)の農民運動を知る上で、貴重な資料となりうるであろう。

(立命館大学教授 大蔵輝雄)

(九二・九・二〇稿—再録)

伊根村は、また、谷口善太郎氏の教育委員選挙のときに文化工作隊で河田賢治氏と共に行ったことがある。汽船のつく波止場の附近の旅館の玄関で、伊根の子供たちにせがまれて、昼に幻燈を映したことがある。子どもたちは、アリババの盗賊の幻燈をみて大変よろこんでいた。幻燈の説明をしたのは、委員長河田賢治氏であった。幻燈のあと、河田委員長と私は教育委員候補谷口善太郎氏の推薦街頭演説を、網を入れしている漁師を相手にやり、その晩は伊根小学校で党的演説会を開催した。

この教育委員選挙では残念ながら谷口善太郎氏は落選したが、翌年の一九四九年(昭二四)一月総選挙では、一区で谷口善太郎二位、二区では河田賢治五位で当選したのである。

この選挙の勝利のあと、伊根の党組織も大きくなり、一九五〇年(昭和二五)の全京都民主戦線統一会議結成、つづいて、嵯峨民主党の当選で、伊根の党組織はますます強固になり、伊根、本庄、朝

妻、日ヶ谷、筒川等の合併初の町議選では、^二名の大きな町議団にまで前進したのである。

伊根村には早く社研が組織されたが、文化運動も同時に起きてきた。

現在の京芸、及び人形劇団京芸が組織される以前に、京都演劇集団なるものが終戦直後組織された。演技と发声などの指導を直接指導していたのは、その頃満映から帰国して来た北川鉄夫氏や、戦前、左翼劇団青服劇場をやっておられた杉村長之助氏らに指導をうけていた。

練習場は朱雀第二の作法室や、演劇団の世話役をやっていた故鎌田豊君の作業場——一条城南東——等を使っておこなつていた。組織はささやかであったが、稽古にはいつも十名程は集つていた。私はこの演劇団の事務をやっていた。事務所は一時私の家に設置していたが、そのあと、丸太町御前の尾上良知氏に移した。

ところで、伊根村に終戦直後演劇団が行ったのは、この演劇集団で、オルグにいったのは私で、

話したのは和久田幹夫氏であつた。また、劇団をつれていったのは指導者であった杉村長之助氏や、西村清三氏等数名であった。昨年私の屏風展を宮津で開催したの機会に、丹後文化人交流会と京都文化人交流会の合同交流会を開いたが、この時、出席しておられた和久田幹夫氏から当時のことが話され、実に懐かしい思いがした。

上宮津と日農支部

これでだいたい奥丹、丹後、橋北方面を歩いた。ここで丹後の政治、文化の拠点である宮津のことについて書いてみることにする。一なおいままでに書いた奥丹後、丹後、橋北のなかにも多くの見落しがあると思うが、それについては思い出したとき書き加えることにする。ところで、宮津にはいるまえに、合併前の上宮津のことに關して一言ふれておくことにする。現在上宮津は宮津市に合併しているが、終戦当時は上宮津村であった。上宮津には終戦後早く農民組合が組織されたところである。あとでふれるが、終戦後、党組織が確立し、大衆団体の一つとし

て、一團体北星会が組織されたが、これに参加していた上宮津の池田藤之助、梅本正男氏らが中心となって、三十五、六名で日農支部が組織された。その動機は、地主の農地委員に迎合して土地解放がやられたために、それに反対して池田、梅本氏等が秘密で何回も集会をもち、農民組合の結成に取りついたのである。これを直接指導したのは泉隆氏であった。そのころ、すでに上宮津には全農が組織されていたが、池田、梅本両氏らはボイコットされていた。日農支部の農民組合の結成によって、農地の解放だけでなく、地主の家屋敷まで解放させたのである。このようなことは本当にめずらしいことである。梅本正男氏は日農京都府連の執行委員をやっておられた。

中嶋利雄氏のこと

また、この梅本、池田両氏の他に上宮津には中学校の校長をしておられ、また京教組副委員長を長い期間つとめておられた中嶋利雄氏が住んでおられる。中嶋利雄氏は教育、労働、文化運動と多方面の分野で活動されているが、郷土史家としてもなかなか造詣が深

い。また、現在の全の運動にも力をつくしていただいている。数年前日農創立五十周年記念に全日農京都府連が作成した、京都府農民運動の年表を作成されたのは、この中嶋利雄氏である。全資料が焼失した悪条件を克服して、こつと、京都府下の各農村を廻り、農民運動経験者から記憶をひきだして年表を作成されたその努力は、高く評価すべき業績である。

京都人民解放連盟と

共産黨の再建

ところで宮津に就いて書くことにする。

一九四五年（昭二〇）八月十五日、日本帝國主義者はボツダム宣言を承認し、無条件降伏した。十月十日政治犯三千名は釈放され、徳田球一書記長ら党幹部は出獄した。京都においては、十月二十一日烏丸丸太町下る新聞会館で、解放運動犠牲者出獄歓迎大会が盛大に開催され、そこで、人民解放連盟の結成が提唱され、川端丸太町

下るところにあった和風書院に「京都人民解放連盟」の事務所がおかれた。これが京都に於ける終戦直後できた革命運動の拠点である。また、現在の全の運動を中心として、党组织の再建の活動がおこなわれたのである。そのころ小松雄一郎氏や竹中恒三郎氏等が京都の党再建に努力しておられた。党の再建準備会が和風書院でひらかれたのは十一月で、この会議で第四回党大会の代議員が選出されたと記憶している。

人民解放連盟丹後支部、丹後の共産党

ところで、宮津においても、京都のこの新しい政治状況が生まれるや、ただちに「人民解放連盟丹後支部」が組織された。これは太田典礼氏（のち党から脱党）、西村四郎氏らが中心となって組織され、事務所は、西村四郎氏宅におかれ、

長壁民之助、井上公作、沢村秀夫、三津屋須善諸氏らが参加したのである。つづいて党の再建がおこなわれ、この人民解放連盟に参加していた人々が党を再建した。その当時の顔ぶれを思い出すと、西村四郎、長壁民之助、井上公作、沢村秀夫、三津屋須善、前田保三郎、池辺純一、奥田茂雄、渡部桂舟ら諸氏がうかんてくる。再建直後、事務所は西村四郎氏宅に

あつた。のち沢村秀夫氏宅に移転した。私が農民オルグで丹後に行動した。郎氏の家には、よく中学生や、青年が来ていたが、その青年を相手に西村氏は「共産党宣言」や、「唯物辯証法」の話をしていたことをおぼえている。党的会議はその頃はよく西村四郎氏の家の二階で開かれていた。私は、竹中恒三郎氏のあと京都に来ていたーその頃京都の党的事務所は絲屋寿雄氏の家にあつたー山辺健太郎氏の言葉で、峰山の池辺純一氏、舞鶴の河田賢治氏の家を訪ねるよういわれ、両氏に会いにいったことがあった。

一、志賀義雄、高倉テル、柄沢ト
ノ子ら五名が当選しただけで、京
都府では党的候補は落選した。その
ときの三候補の票は六〇、五三一。

この総選挙のあと一九四六年(昭二二)五月、宮津の党が中心となつて文化団体の「北星会」が組織された。これは、思想、文化の啓蒙運動を目標としてつくられたと同時に、民主主義の統一戦線を志向したものであつた。だから例会は巾広く、学術研究をはじめ、芸術鑑賞会、文化講座、その他多面的な活動がおこなわれていた。

ところで、この文化団体「北星会」は、その後、会の党員と太田典礼氏との意見の相違で分裂し、党関係の人々は「北星会」から離れて、自由懇話会を組織したのである。この「北星会」の分裂は太田典礼氏の画策で起きたもので後日、太田典礼氏の支持団体になってしまったといわれている。自由

懇話会はその後発展し、進歩的知識人を結集する役割を果していく。現参議院議員の小巻敏雄氏らもこれに参加していた。

宮津の党は、「北星会」、つづいて「自由懇話会」という文化団体を組織し、広汎な文化運動を展開するだけでなく、終戦後、大江山ニッケルー日本冶金ーの首切反対闘争、つづいてその労働者の住宅追出反対闘争と、長壁民之助氏を先頭に闘争を指導してきた。

「病床日記」を発表するに当たつて

編集部
湯淺貞夫

(一) 農民運動の父

一九四六年（昭二）四月には、戦後第一回の総選挙があり、京都全区一このときは京都府全体が一選挙区制であり、二名連記制であった。党からは安田徳太郎氏、小林為太郎氏、太田典礼氏が立候補した。私は太田典礼氏の応援に与謝郡にはいっていた。

戦後第一回総選挙

な活動がおこなわれていた。
この文化団体は実に素晴らしいものであつた。これは、まず

京都全区——このときは京都府全体が一選挙区制であり、二名連記制であった。党からは安田徳太郎氏、小林為太郎氏、太田典礼氏が立候補した。私は太田典礼氏の応援に与謝郡にはいった。

この選挙の時、丹後地区委員会にいたが長壁民之助氏が陣頭で指揮をとっていた。この選挙の結果は全国的には野坂参三、徳田球

津の党組織の中心的な人々が（小員）、みなそれぞれ、文化的感覚を身につけていたからだと思われる。たとえば、三津屋須善氏は戦前から詩人活動をやっていた人であり、私が中心になつてやっていった「記録」にも詩を発表していく。また沢村秀夫氏は、考現学、美術、短歌等をやっていた。また、その他の人々も、学生運動の人々も、医師といった知識人の集

(一) 農民運動の父

運動に参加し、一九二九年の四・一六共産党弾圧では京都の赤旗配布の責任者として、六年間の獄中生活を余儀なくされました。戦後は日本共産党京都府委員会の農民部長、京都府農地委員、そして日本農民組合京都府連の書記長として、農地改革や米の強制供出、重税反対などあまたの闘争を指導し、京都府下二万人の農民組合を組織しました。「泉さんの歩かざる村はな

燎原

し」と言われた程、府下各地の農村を回り農民に強い影響を与えました。だからこの日記の冒頭にあるように、泉さんが病氣で入院すると安井病院の院長が、「この人は農民運動の草分けだ」と周囲の人々に紹介したのです。

最近、日本共産党京都府委員会と京都民報社が発行した「京都・礎をきずいた人びと」の本の中に泉さんの業績がくわしく書かれています(同書品角論文)。

(二) 問題のある所へ飛んで

ところで、この泉さんの業績について本誌「燎原」では多くの人々によって言及されていますが、中には「泉さんは組合主義者で徳田球一にどなられた」(品角「農民運動散歩記」、井上「米よこせ闘争」とか、また「ピタリと運動を止めたのはなぜか」(高野源治稿)とかの疑問や憶測のようものが生まれそうな記述がありました。これらは決して泉さんの全体の評価を変えるものではありませんが、私達はあらぬ誤解や偏見をなくし、泉さんと京都の農民運動の歴史のため当時を知るものが、事の真実を解明しておく必要があると思います。

先ず泉さんは戦前、戦後を通して農民の中に入つて地道な活動を行つてい

ま、一九五〇年代になって、いわゆる極左冒險主義的指導を行つた徳田翼日和見主義の組合主義に見えたのでしよう。活動方針をめぐつて時々意見のちがいがありました。しかし今日では明らかに泉さんの方に理があったことはその後の歴史が証明しました。

更に「農民運動をやめた」という疑問もこれは当を得ておりません。泉さんは一九四六年二月農民組合京都府連合会が結成され、書記長に就任し、農地改革が進行すると從来の小作料減免や耕作権確立の闘争は当然少なくなりました。そして重税や重供出に反対する闘争をサボル反共右派の主体制派は農民組合から分裂しました。そして反帝反封建のあやまつた闘争を提起し、山村工作隊に見られる様な極左冒險主義が横行しました。中には常東農民組合のように反占領闘争一辺倒の組合もあらわれ、日本の農民運動は全国的に新しい方向をめぐつての混乱と模索の時代でした。

農民組合書記の奥田茂雄氏と井上喜太郎村議が逮捕されると「奥田・井上を帰せ」の大集会を計画し、府庁交渉をする組織たのは泉さんでした。私たちは府庁に夜どうしすり込みを行つたのです。私はこのあと党の任務で丹後や舞鶴をまわりやがて東京に派遣されました。だが、泉さんは農民運動のかたわら家族の生活を支えるため洋品雜貨などの行商を行いました。丹後から出て来て日農府連の書記であった奥田さんが、上林の米よこせ闘争で逮捕され、それが釈放されたあと、泉さんとがわって日農の府連(統一派)の書記長になつたのです。一九五五年日本共産党中央全協が開かれ極左冒險主義の克服と第七回党大会を経て一九六一年の第八回党大会の綱領確定により、京都の農民運動も反帝反独占の闘いへ切り替

請、京都府農地委員会) る幾多の請願、陳情等々を指揮しました。

一九五二年、私は泉さんが府庁の農地委員会の席上で、勇敢に農民の立場を代弁している姿を目のあたりにしました。その時、自作農委員の谷口初三郎委員は「泉君にはかなわん、問題ある所に飛んで行って、そこ問題を引きさげてストップをかけるのだから」と。泉さんの活動方法はまさにこの言葉どおりの所が真骨頂でした。一九五三年、上林の米よこせ闘争で、農民組合書記の奥田茂雄氏と井上喜太郎村議が逮捕されると「奥田・井上を帰せ」の大集会を計画し、府庁交渉をする組織たのは泉さんでした。私たちは府庁に夜どうしすり込みを行つたのです。私はこのあと党の任務で丹後や舞鶴をまわりやがて東京に派遣されました。だが、泉さんは農民運動のかたわら家族の生活を支えるため洋品雜貨などの行商を行いました。丹後から出て来て日農府連の書記であった奥田さんが、上林の米よこせ闘争で逮捕され、

そこで私達は、ここに泉さんの人生の最後の記録とも言つべき「病床日記」を発表することにしました。

この日記は小型の手帖式のもので一九六八年七月一日から九月二五日までの約三ヶ月間のものです。本人には癌の告知はなされておりません。しかし日々迫る死期を感じてかどうか一心不乱に読書を重ね、再起をめざして最後まで気力を振りしづらこの日記をしたためました。そして九月二五日で

えが行われました。自作化した農民への自作農維持資金獲得闘争、共同農機具利用組合、税対、価格補償等々その農民運動は再び高揚を迎えるのでした。そして一九五八年分裂していた日農統一派と主体性派とを団結させ全日農京都府連を結成したのでした。泉さんは全日農府連顧問に就任していました。私は全日農府連常任委員となりましたが、同時に党の奥田府農対部長の下で農民部員となり一緒に活動を行つたものでした。

以上が当時の経過ですが泉さんの指導で育った農民活動家はいかに多くなつたことか、泉さんが「組合主義者」だとか「ブツツリ活動をやめた」などとは全く当たらないのです。

(三) 最期まで「赤旗」

私が泉さんにともなわれ日農の全国会議に出席しましたが、甲論乙駁その止まる所を知らずというようなものでした。京都に帰つた泉さんは新しい時代に適合した運動方針を追求しました。桂・川岡の米軍基地土地取上げと第七回党大会を経て一九六一年の第

遂にとだえてしまっているのです。そ

して医師、看護婦と家族の手あつい看護の効なく一九六八年十二月二十二日遂に逝去されたのです。

この日記を貰っている思想は第一に日本共産党员としての思想の一貫性です。常に大衆が歴史をつくる観点に立ち歴史を見ています。そして読書と学習につとめ最後の最後まで家族や隣人に細やかな心をつかい、世界の人民にかぎりない愛情をそそぐ共産主義者としての高い人間性がひしひしと身に迫ります。第二は高い教養と識見、階級性に貫かれた情勢の見方です。今日のソ連崩壊の端緒となつた霸権主義のあやまりについては「チエコへのソ連軍の侵攻は大問題であり民族が自主的に解決すべきもの」と喝破しています。ワルシャワ条約や中国問題等の当時の認識と評価は歴史的制約もありましたが、国内の三派全学連のトロツキスト批判は見事、そして第八回大会の党綱領に対する同意は完璧なものがあります。訪問する戦前からの同志山中平治さんや同志小山真一さんたちとの会話、同じ支部の同志達とのやりとり、綱領学習を約束し多数の革命的文學を読みしその一つ一つに適確な評論や感想を加えています。そして最期に京大病院で目が見えなくなるまで「赤旗、赤旗」といって赤旗新聞をなでて

いました。

この日記は一人の共産党员の私的な記録ではありますが、私達の生き方としてその立派な生涯の最後の記録として京都の民主運動史を語る会の機関誌に収録する価値のあるものと思い、ここに発表することにふみ切ったものであります（一九九四・三・一五）。

94年4月7日、京都府知事選挙は終盤を迎えていた。16年の自民党政政を、革新民主府政にかえたいという思いが、日ごと大きくなっているようだ。鷺川民主府政を再建したいという願いだ。府民のこころに深くひびいているのは、コメ問題である。「日本のコメ」が食べられないという現実に、政府の減反政策を敢然として批判し、「京都食管」をつくりあげた鷺川知事の府政を鮮烈に思い出している（おくだ）。

会や本誌については、編集部担当の奥田修三（宇治市広野町寺山17-1-257、○七七四・四三・一三四七）、湯浅貞夫（京都府船井郡日吉町保野田、○七七一七・二・〇一四六）の両名のいざれかにご連絡下さい。

泉 隆・病床日記(1)

自一九六八年七月一五日至九月二十五日

○七月十五日 曇

戦前、戦後、京都で「農民運動の父」といわれた泉隆さんは、今から二六年前肺癌で京都安井病院に入院、約半年間の闘病生活を送りましたが、遂にそ

の年（一九六八年）の十二月二十二日京大病院で死去されました。享年六十六才でした。

この間泉さんは死の床にありながら二つの文章を書きあげました。その一つが「会心の闘争」といって自伝的闘争記録で、先年「山宣研究」誌に既に発表されました。他の一つがこの「病床日記」です。

○七月十六日 曇り雨 涼しい
日刊を読む。家内面会に来て色々細かい配慮に感謝する。大病院、安井病院の医師、看護婦の誠意ある診療、忠告深く感じ、私たちも他に対し善意を尽くすべきこと家内に話す。

今回御家族の御了解を得て発表することにしました。最期の最期まで闘争、心を忘れない。泉さんの生きざまに、私達は深く感動をおぼえるものです。紙面の都合で数回にわけて掲載します。

- 七月十七日 曇だが雨降らず
祇園祭が賑やかな事と思うが此處では全然感受されず。午後息子夫婦見舞いに来、店を見付購入の意を示せり。若い者に希望こそ大切にすべきで、迫力ある人生の出発を祝福する。夜食堂で日中不再戦の話を副院長の山本氏がし、中国の映画を鑑賞せり。
- 七月十八日 木曜 晴
宇治の山中君が交通事故で足をケガ、半年以来、この病院に入院、年齢約七五才なるも意識少しも老化していないようで、山宣映画の武器なき闘いの登場人物につき不満の点をはなす。北川商店従業員及小山君見舞に来てくれ元気に一日過ごす。未だ機会のなかつた「蟹工船」小林多喜二の小説を読み、こんなに勝れた本を今までに読まなかつた事の自分を批判。娘君代の感覚の侮り難さを知りたのもしく思う。
- 七月十九日 (金) 晴
一日中、暑く汗ばむ。小山君、果物の缶詰を持って見舞いに来
- 七月二十一日 晴
今日は真夏の一番暑いときだろうか。入院の私にははつきり分らないが兎に角肌着がネットにする。身(体)を拭いて着替する。息子夫婦が見舞に来て会社に辞職の申し出し新しく店を出す計画を話す。
- 七月二十三日 火曜 晴
蒸し暑い、中野重治の梨の花、小説を読む。同郷とてその習慣風俗等幼児を思い出ださる。今日は主として家の帳面の整理です。

92号につづいて、この号では、
94・3・9～94・3・11に受領さ
せていただいた方々のお名前を掲
載させていただきます。厚く御礼
を申し上げます。

〔燎原〕事務局

領収書にかえて

圭子、章子のアルバ―を持って
来た。可愛い孫の写真をいつま
でも見て楽しかった。山中君が
見た田中房の卑怯な行動を聞か
せてくれた。「山の民」の小説
よむ。明治維新前後の変革時の
政治により勉強をする。

(以下次号)

山下 茂	左京区
三上 悟	亀岡市
三上 愛子	東山区
小野 喜三郎	上京区
大松 勇	東京都中野区
山中 登	宇治市
木村 正吾	右京区
浅井 元子	左京区
山口 正之	宝塚市
田畠彦一郎	左京区
都築 文義	滋賀県滋賀郡
中内 広	山科区
白井 照代	左京区
青柳 英子	東京都新宿区
小林 綾	宇治市
京都南法律事務所	伏見区
田尻 博一	城陽市
渡辺 照子	八尾市
定免 政雄	堺市
木又 謙二	左京区

田畠 忍先生の訃報に接して

編集部

「肉体は失せても夜空の星、地上の花となって咲かん」との辞世の句を残して、一九九四年三月十四日、田畠忍先生が永遠の彼方に旅立たれました。

田畠先生は我が国の憲法学の大家であり終生、永世中立論を唱えられた透徹した平和論者でした。我が「京都の民主運動史を語る会」の会員であり、あの不屈の闘士といわれた田畠シゲシさんの実兄で共産党的よき理解者でもありました。最近では教子の社会党土井たか子氏に「議長に就任するな、護憲新党をつくれ」と忠告されたそうです。先生は頑固なまでに革新勢力の統一戦線を主張されたすぐれた学者でした。

時あたかも「憲法を暮らしに生かす民主府政」と改憲と悪政推進の七党軍團の春、田畠先生を失うことは誠に大きな損失であります。

先生は一昨年まで自ら「永世中立」誌を発行され常に護憲平和論を強調してこられました。私たち「京都の民主運動史を語る会」にも「永世中立論」や「教科書検定問題」

で特別に講義をいただき、機関誌『燎原』には時宜に適した論稿を度々頂戴したものでした。その際原稿が活字になつても必ずゲラ刷りをとりよせもう一度推敲なさるという厳密な方でした。

たとえその身は消えようとも天空の星と輝き人々の道しるべとなり民衆の上に永く平和と幸福の花をもたらさんと

の言葉は、死して尚平和と正義の道を征かんとする先生の強固な御遺志が痛感され身がひきしまる思いがするのです。私は先生の御遺志をうけつゝ世界平和と日本民主化のため引きつづき奮闘することを先生の御靈前に固く誓うものであります。

亀田得治先生を憶う

編集部

「私は若い時、賀川豊彦先生から手ほどきをうけ農民運動の道に入りました。そして弁護士として小作争議では小作人の弁護士をつとめてきました。

戦後は社会党に入り日本の革新のために参議院議員とな

り頑張ってきましたが社会党が右傾化し、ルビコン川を渡つてしまつて民衆の願いに答えなくなつたため、今日では

日本共産党と共に統一戦線の革新懇運動に精進しております。老骨に鞭打つて頑張ります。お骨に鞭打つて頑張りますので皆さんも大いに奮闘して下さい」

これは福知山労働セツルメントのホールで行われた、三年前の京都府農民組合連合会の定期大会でメッセイジに立った亀田得治さんの挨拶です。

亀田先生の訃報に接し次の弔辞を送りました。

「亀田得治先生の御逝去をいたみ、つつしんでおくやみ申しあげます。私たちは先生の御遺志をついで日本の民主化のため奮闘することを誓います。安らかにおねむり下さい。」

「京都の民主運動史を語る会」

今日の日本の統一戦線の問題について醇々と語られました。

亀田さんは大阪に弁護士事務所を開設し、大阪で国會議員に出られ、大阪の知事選挙には、革新候補として闘われました。晩年は京都府長岡京市に住み全国革新懇の世話人として御活躍になりました。

我が「京都の民主運動史を語る会」の会員としても常々重要問題について発言、「燎原」誌上にも度々玉稿を賜りました。

亀田先生の御逝去をいたみ、つつしんでおくやみ申しあげます。私たちは先生の御遺志をついで日本の民主化のため奮闘することを誓います。安らかにおねむり下さい。」

「京都の民主運動史を語る会」